
Release

越智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Release

【NZコード】

N3175A

【作者名】

越智

【あらすじ】

どうみても失敗作です（・・・）

プロローグ

力を失つた少年の瞳は、眼前に広がる光景を音もなく見つめていた。

新縁に栄えていた原は一面、飛び散る液体により錆ついたかのように深紅に染まる。

粘着質の液体が地に咲く花々に纏わりつき、その白い花弁を乱雑に散らす。醜くさもしいその姿は、自らの行く末路への道連れを探すかのようにも見えた。

脇に横たわる肉片はもはや誰とも判別つかない。この体でも事前までは人の形を成していたそれは、今もなお生にしがみつくかのごとく枯れた咽を鳴らし地を這いずる。

地獄図。その惨景を見下ろす男がいた。

身に纏う黒衣、その黒と対を成すかの白い仮面。絶望を煽りたて希望を断絶するその風貌は、まさに死神の容姿であった。

その死神は、ゆつたりとした足取りで距離を縮める。顔を覆う仮面は赤色に染まり、こぢらを覗く瞳は死人のように冷たく輝いている。

手には人体の一部らしき物体を掴み、引き摺り、恐怖を与えることを楽しむかのように引きちぎった。

「お父さん……どう?」

恐怖に押し潰されそうな少年の瞳が、小刻みに震えながら父親を捜していた。

しかしその目に映るのは、一様に特定するのが困難な程に切り刻まれ、乱暴に転がる肉塊のみ。

足元に転がる何者かの手首を、黒い革靴が踏み潰した。

鉄の擦れるような音が鳴り、続いて鈍く、低い音が響いた。

自らの左腹部に鋭い痛みを覚えると同時に、ぬめりを含んだ液体が流れだすのがわかつた。

その液体が先程まで自分が見ていた『血液』と呼ばれる紅い液体だと認識するのに、さして時間を要しなかつた。

小さな身体から臍脂えんじに染まる刃をゆっくりと引き抜かれた。銀の抜き身は血糊がごびり付き、合間に見える刃は陽光を反射し光を放つ。

男はその姿を見下ろしながら満足そうに鼻を鳴らし、少年に背を向けて歩きだした。

泣き叫ぶ声さえも鳴らない。身体からは気持ちの悪い脂汗が染みだし、呼吸は不規則に荒くなる。

これが、死ぬという事……。

だんだんと意識が遠くなり、辺りが次第に暗く、静かになつていくのがわかつた。

「お父……さん」

その声にもならない哀哭は、誰に聞かれることもなく虚空に飄した。

面倒な事になつた　と、フィン・トライアルは目の前の怪物を田にして思つた。

鬱蒼と茂る森の中に、灰色の岩のよつた塊が鎮座している。その巨体は見るからに頑強そうな鱗に包まれ、体躯からは異様なまでに筋肉質な四本肢と太く長い尻尾が伸びていた。

こちらの存在に気付いているのか、身体を起こして威嚇の態勢をとつてゐる。

その魔物は、爬虫類を思わせるその外見から俗に『リザード蜥蜴型』と呼ばれている。ユウラの大陸にはびこる魔物の中でも上級の部類に入る、強力な魔物だ。

狼型ウルフぐらいたしか戦つたことの無い、フィンが適うような相手ではなかつた。

フィンはただ、この先の街に用があり、この森を通つただけだ。それが、こんな魔物に出会つなんて。

舌打ちをして自らの不運を嘆いだ。

蜥蜴型のワニのような口からは、忙しく白い吐息が漏れています。静かな鳥のさえずりに混じり、重く低い、唸るよつた声が周囲に響いた。

頭を動かし、気持ちの悪いほどに無機質な瞳でこちらを睨みつける。

野性の、獰猛だが純粹な殺意フィンは怯んでしまつた。まるで心臓を握り締められたようだ。

蜥蜴型なんて大物、本で呼んだことならあるが実際に田にした事など一度もない。

あまりに格上の相手に、情けないことに強い恐怖を感じてしまつたらしい。

自分の心臓の鼓動が段々と早くなるのがわかる。細長い指先は微

かに震え、背中に脂汗が滲む。

(くそ……なんでビビッてんだよ)

錯乱する心を整えようと、精神を集中した。目を瞑り、大きく深呼吸をする。

(そうだ。戦い方も弱点もわかる……勝てないはずがない……)
恐怖に屈しそうになる精神に必死に言い聞かせた。

逃げたくはなかつた。

フィンの知るかぎり、動きの緩慢な魔物である。背を向けて走りだせば、あるいは逃げきることも可能だろう。

だが、今のフィンの脳裏に『逃げる』といつ選択肢は無かつた。選びたくはなかつた。

あの日、自分を見捨て逃げ出した父親。愛すべき母、そして妹を死に至らしめた父親。

その父親を自らの手で殺す日まで、死ぬ事は許さない。父親と同じように恐怖から逃げ出す事も許さない。

母の死んだあの日、そう心に固く誓つた筈だ。

唇を噛み締め、優しく微笑む母の顔を思い浮べる。すると、心の奥底、さらに深いところから力が湧きってきた。

その力は身体中を巡り、指先の震えを止め、心臓の鼓動を整える。人形のごとく固まつた四肢を解し、醜く怯える心を紫色の感情が満たした。

紫色の感情は次第に力強い勇気に変わる。

(負ける事などは出来ない)

黒い瞳に輝きが増し、自分の眼前に居る蜥蜴型の瞳を睨み返す。その眼差しは陳腐な虚勢でも、自暴自棄になり躍起になつたのでもない。

今のフィンは、闇よりも黒い『復讐心』によつて突き動かされている。

今まで知らなかつた力が全身を満たしていた。
恐れなど微塵も感じない。

両手で剣の柄をしつかり握り、半身を開き切つ先を低く構える。こちらの殺気に圧されたのか、蜥蜴型の金色の瞳が一瞬だけ揺れ動いた。だが、その瞳はすぐに動搖を押し殺す。野性の本能か、敵に弱みを見せまいとする感情の働きだった。

大きく裂けた口を開き、こちらを威嚇する。ぬめった唾液に満たされている口内は、無数の鋭い歯が乱立していた。

蜥蜴型は大きく息を吸い込むと、大地を揺るがす程の咆哮を上げた。

辺りの鳥達が一斉に飛び立ち、小動物が怯えるよつた叫びをあげ逃げ去る。

だが、今のフィンには嚇しにすらならない。依然その黒い眼は殺意に満ち溢れ敵を睨み付けている。

咆哮の余韻が止むと、辺りに静寂が訪れた。

フィンと蜥蜴型。互いに互いを睨み合う。

動物達の気配が消え、不気味に静まり返る森の中。両者の間を切迫した空気が包み込んでゆく。

蜥蜴型の荒い息遣いがはつきりと聞こえてくる。湿氣を孕んだ生臭い息が、こちらの体にも吹き掛かってきそうだ。

張り詰めた緊張の糸。互いに相手の隙を狙おうと構えている。

飛び掛かるのが吉か、切り返すのが吉か。

フィンは大きく息を吐き、さらに腰を低くした。

睨み合いが続く。短気な奴ならば自棄を起こし飛び出しているだろう。

フィンはわかっていた。今の自分には『恐怖』は無いが敵を倒せる『力』もない。闇雲に飛び掛かっても自らの命を縮めるだけという事を。

焦る気持ちを押さえ、斬り掛けのタイミングを見計らう。

小さな風が吹き、フィンの茶色の髪が微かに震えた。

停止した時間を破つたのは蜥蜴型だった。

フィンは体勢を低く構え、地響きを上げ迫る敵を睨む。

緩慢そうな敵の動きは予想以上に速い。四本の腕で大地を叩き、一気に距離を詰めてくる。

ほんの一瞬で敵の間合いにまで詰め寄られた。

限界まで開かれた巨大な口が目の前に迫る。強靭な顎でこちらを噛み碎くつもりだろうか。

フィンは右前方に飛び出し、紙一重で攻撃を躱した。

蜥蜴型の口が、空気を切り裂くような音を出す。

フィンは素早く身を翻し、巨体の側面についた。

勢い余つた蜥蜴型は木に頭から激突し、弱点である腹部を曝け出している。

剣の切つ先を敵の白い腹部に定めた。息を吸い、全身に力を込める。

躰のバネを最大限利用し、右足で地面を蹴り上げた。

同時に右腕を伸ばし、矢のような突きを繰り出す。

嫌な感触だ。

剣は皮膚を破り、蜥蜴型の体組織を千切った。

途端、生白い腹部から緑色の血液が流れる。

(やつた……！)

会心の一撃に胸が踊る。

束の間、鼓膜を破るような衝撃がフィンを襲つた。

フィンは折れた剣と共に宙を舞つていた。

力のままに暴れた蜥蜴型の巨体が、細身の剣」とフィンを弾き飛ばしたのだ。

突然の出来事に視界が揺らぐ。その目に映つたのは、地面。

「…………えつ」

わけもわからぬまま、今度は肩甲骨の周辺に激痛が走る。

瞬間。

痩せた身体は地面へと叩きつけられていた。

フィンの体程もある尻尾の一撃だ。

あまりの衝撃に肺の機能が麻痺する。

(息が……)

考える暇もない。

「……ぐあつ」

衝突の勢いで体が跳ね上がる。

少しの間宙を舞い、今度は腹部への一撃。

薪を折ったような、鈍い音が聞こえた。

一時の空中浮遊を体験した体は、力なく地面に落ちた。身体の節々が痛い。

頭を打ち付けたのだろうか……どうも、ぼんやりする。

ひどい耳鳴りに混じり、誇るような遠吠えが、一度、二度、三度聞こえた。

ぼろ雑巾のように傷ついた身体に、空気を震わせる声は堪える。短い戦いは終わつた。フィンの敗けだ。

あまりにあつけない幕切れに、フィンは立ち上がる氣力も起きない。

痛覚が麻痺したのか、痛みはだんだんと鈍くなつていく。聴覚も、視覚もだんだんとその機能を失つていく。

「……死ぬ……のかな」

虚しさを振りほどこうと声を出すが、かすれたその声は一層に胸を締め付ける。

(死なないって……誓つた筈なのに……な)

すでに輝きを失つてゐる瞳から、一粒の涙が零れた。寂れた心にぽつかりと大きな空洞が空いた気がする。

(なんだかもう、面倒臭くなつたな……)

力の無い眼で空を見つめた。霧の掛かつたようにぼやけた視界は、歪みながらゆらゆらと揺れています。

(ああ、綺麗な空だ……)

口元に笑みを浮かべ、そつと自然に身を任せた。誰かの声がした。

S C E N E · 1 (後書き)

まあ、なんか展開がわかりにくいかも（・ A、）

日^ひの光に満ち溢れた部屋の中。

なぜか、ベッドの上に正座している男^{おとこ}がいる。

猫背の瘦躯、茶色い髪に焦点のあわない黒い瞳……。フインだ。

その向かいには、威圧感を剥き出した長髪の女性^{めんじょ}が立つている。

『反省中』といった構図の中、一人の間にある空氣はやけに重苦しい。

ぼやけた瞳で虚空を見つめているフインの耳に、大きく息を吸う音が入った。

瞬間。

「ここの馬鹿者！」

張りのある女性の声が部屋中に響き渡った。

その音に、空気が震え鼓膜が一瞬痺れる。

怒氣を孕んだ痛烈な言葉の標的は、もちろんフインだ。

「むう……」

いきなりの大声に、フインはおどけたように肩をすくめた。だが、すぐに弱々しい田を作り出し、相手の女性を見つめる。その田は怯えと反省の色が伺える……。

よう見えてる。

……田。

そのように見せている。

(ここは反省してるふりをして……)

実際、内心では怯えも反省もしていない。
それよりも

「ここがどこなのかな？」

という事が気になり、それどころではない。

それに、フインは慣れていた。

煩わしい罵声を浴びせられることも、くだらない説教を受けることも。さすがに目を覚ました途端に正座されたのは初めてだが。

もちろん、罵声や説教に対する独自の対処法も心得ている。

じつこうときは『反省しているふり』をすればいい。

じちらが下手に出れば、少なくとも面倒な事にはならない。

……はずだつたが。

弱々しい目は、いつのまにか無意識に弛んでいた。

フィンは日の前に居る女性に見惚れていた。

ついさつき、自分に対し罵声を飛ばした相手に。

腰の辺りまである黒の髪は日の光を受け艶やかに輝き、その髪とは正反対の透き通るような白い肌は、なめらかで実に瑞々しい。まだ多少の幼さを残す顔立ちながらも、鋭い目元は強い意志を感じさせ、大人な雰囲気も持ち合わせていた。

見た感じ華奢であろう身体を厚手の白の服が包み込み、首には服と同じ白のマフラーが巻かれている。

その容姿、風貌は誰が見ても『美人』の類に分類されるだろう。(むう、よく見るとなかなか……)

どことなく卑しいフィンの視線に気付いたのか、彼女の目付きが訝しげに変化した。

その変化を捉え、フィンは自分の目が弛んでしまっていることに気が付いた。

(しまつた……)

あわてて心を正し、再び弱々しい目を作り直す。

(何をやってんだ、俺は)

彼女の魅力に負けてしまった自分を自分で叱り、逃げるようになんと顔を伏せた。

幸いなことに、相手はこちらの魂胆に気付いていないようだ。下を向き、怯えたように肩を小さくする。

不真面目な顔を隠しながら、身体はマニュアル通りに動く。ひねくれた青年だ。

今のフィンに、^{リザード}蜥蜴型との戦いの時に見せた狂暴性はまったくと言つていい程なかつた。ある意味こちらの方が悪そうだが。

二重人格と言われば誰もが信じてしまつだらう。

それほどに今のフィンは怠けていた。

いや、蜥蜴型の時のフィンが異様だったのだろうか？

それはともかく、相手の女性はフィンがそんな事を考えているなどは、まったく考慮の外らしい。

フィンの演技にまんまと騙されていた。

怯えているフィンに、一瞬躊躇したのだろうか。ぱつが悪そうに少し間を置き、今度は諭すような声音で話し始めた。

「そもそも、お前は自分の力をだな……」

腫物に触るように、柔らかい口調だ。

だが、柔らかくしようが優しくしようが説教は説教だ。

そんなものを生真面目に聞くのも面倒臭い。フィンは甚だ適当に聞き流した。

殺風景な部屋を彩る女性の澄んだ声は、氣の毒だがフィンの右耳から入り、左耳に抜けていく。

まさに『馬の耳に念佛』状態だ。

女性から発せられる辛辣な言葉の数々も、フィンにとつて、この静かな部屋に流れるBGMですらない。

憂鬱なそのメロディを真面目に聞いていたら氣が滅入ってしまう。まったく耳に入れなかつた。

（はあ、なんでこんなことに……）

フィンは今の状況を把握するために目を瞑つた。頭を回して記憶を探り出す。

フィンが起きたのは、つい先程の事。

起きた時、部屋の中には既に彼女が居た。

「看病でもしてくれていたのか……」

と思ったのも束の間、目を覚ましたフィンを見るなり、

「そこに座れ」

と有無を言わせず叩き起こした

そして、ベッドの上に正座をさせ、怒鳴りつけ、今に到る。

女性の第一印象はズバリ『ヒステリックな乱暴者』だった。その端正な容姿を確認した今は『綺麗な説教好き』にランクアップ（？）している。……どうでもいいが。

なんで自分が怒られているかは容易に想像がつく。

素人の分際で蜥蜴型などいう大物と戦おうとしたからだろう。おそらくは命を粗末にするな、という事だろうか。

（余計なお世話だ）

内心で毒づいた。

フィンにとつては、こんな説教より『ここがどこで彼女が誰なのか』という実のある情報を聞いたかつた。

なのに、

「つまり、お前はまず初歩的な戦術を……」

ぐだらない説教は、まだ続いている。

その声が綺麗で耳障りではないのが唯一の救いだ。

蜥蜴型戦の名残か、背中の辺りがほんのり痛い。そんな事を言つた所で、説教を止めてもらう言い訳にすらならないだろうが。なんせ相手は怪我人を叩き起こし、正座させ、説教を始める強者だ。

とりあえず、ここからの脱出方法を模索する。

出入口は一ヶ所。

ドアと窓だ。

横目で見る壁は石造り。右にも左にも扉らしき物はない。

どうやら、入り口のドアは女性の奥にあるらしい。

強攻策は無理だつ。

身体が痛いし、面倒だし、なにより怖い。

となると、彼女を説得して……。

などと脱出方法を考えていたが、なんだか面倒になつてきたので考えるのを止めた。

思考を切り替える。

(……そいや、正座したのは何年ぶりだつけ?)
いきなり突拍子もない事を考えだす自分に、自分で驚いてみたりする。

ぼー、と昔の事を思い出してみる。故郷のコスカリアに居た頃を。ミドル・スクールで……。

と、なんだか嫌な記憶が蘇りそうなのでやめた。

それでも眠気に襲われないようになると思考を続ける。

(ここは、どこだろう?)

ここはシオンの街だろうか? あの後誰かに助けられ、ここに運ばれたのか? ……。

しかし、それさえも、考える途中で面倒になつた。
どの思考も中途半端に終わつてしまつ。元々、短気な性格なのだ。
じつをしているのは大嫌いだ。

それに、いい加減説教を聞くのも飽きてきた。

(大体なんで俺が怒られてんだよ。あああ、眠う……)
氣を緩めた瞬間、押されていた眠気が体を支配する。
その睡魔に堪え切れずに、あぐいをしてしまつた。
「まったく。そんなひ弱な身体で蜥蜴型(リザード)に勝てるとも思つて……
つて聞いてんのか!—!

再び怒声が飛んだ。

確実に先程のよりも大きい。

「ひつ」

今度は演技ではなく素で肩を縮ませた。

あんな細そうな身体のどこから、こんなに大きい声が出るのだろう? 不思議だ。

とりあえず、フィンは姿勢を正し、

「すいません……つい」

一応、形だけの謝罪を済ませた。

相手の、今にも刺し殺さんとする見下ろした視線が痛い。

(やつぱり『乱暴者』だ)

嫌な殺気に、ついつい弱氣になる。

さつきまでの眠氣は綺麗に吹き飛んだが、どうやら先程よりも状況は悪くなってしまったようだ。

「まつたく、大体お前は……」

気分を悪くしたのか、ぐどぐどと説教が続く。

悔しいのか、哀しいのか、フィンは無性に泣きたくなってきた。力なく頭を垂れるフィンの表情は、無駄な抵抗をやめてしまった。

(はあ……これは後一時間は続くな……)

辛くてため息がでそうだ。

そんなフィンの予想に反し、彼女の説教は延々四時間も続いた。

その中で、七回の怒声と三回の張り手が飛んだ。

頬が痛い。

フィンは完全に座ってしまった田で、田の前に面する女性を恨めしく見つめていた。

いつのまにか濃いオレンジ色に染まった部屋。その部屋の色よりも鮮やかに腫れ上がった頬は、心臓の鼓動に合わせて一定のリズムで痛みを放つ。

いくつもの感情が、涙となって目を覆っている。

それにもしても、この女性は何時間同じ言葉を繰り返すのだらうか？
とりあえず、この言葉の一方通行の状況はまずい。非常にまずい。
何がまずいかって、とにかくまずい。

「あの……」

現状を打破するために発言してみる。丁度聞きたい事は山程ある。

「ん……なんだ？」

話を途中で止められたためか、女性の口調がざぶとなく不機嫌な気がした。

だが、そんなことは気にせず質問した。

「えっと。俺って蜥蜴型リザーブに負けたんですね？ 確か

まずは、これだ。

「ん？ ……ああ、負けたな」

彼女は、むしろとした表情を見せたが、質問には答えてくれた。

「あ、じゃあ、誰かが俺を救けたって事……ですか？」

「んー、お前」とき馬鹿を救う価値もない、と思つたんだがな……
私が救けた。ありがたく感謝しろ

「あはは。そうですか。ありが……え？」

意外な言葉に、おもわず間抜けな声を洩らしてしまった。
(こいつが……蜥蜴型を?)

フィンは田の前の女性を確かめるように見た。

鋭い目付きは確かに強そうな気がしないでもない。が、見るからにやせ形の体付きは、おおよそ戦いには不向きだ。

(こんな細身で……?)

「なんだ、疑つてるのか?」

「あ、いや、そんなこと無い……くもない、です」

図星をつかれ、微妙に言葉がおかしくなってしまった。

「ふん……まあ、いい。説明してやる。赤魔法を使った。だから勝てた。簡単だろ? それだけだ」

「え? アカマホウ?」

「はあ……。そうか。まあ、戦い方も口クに知らない奴だからな。知らなくても当然か」

掌を額に当て、なにやらブツブツ言つてる。

赤魔法なんて、聞いた事がない。

「いいか……人の体内には様々な力が流れている。その力の中に、『魔力』と呼称されるものがある。いいな?」

「聞いたことは有ります。たぶん」

どこかで聞いたような、聞いていないような……。

「その『魔力』をコントロールする事によって、人は様々な奇跡、つまり『魔法』を使用できる。まあ、お前みたいな馬鹿には使えんがな」

「馬鹿」

の部分をやけに強調する。

だが、もはやいちいち反応するのも面倒だ。

「魔法には、そのコントロールの方法によつて、赤、青、緑、黒、白に分けられている。」

「……はい」

「そして、私が使つてゐる赤魔法は、体内の一部に魔力を集中し、一時的にその部分の能力を増強する方法。つまり、『内部への干渉』

だ

「……はい」

魔法についての知識はまったくといっていい程持ち合わせていかつた。

なかなか興味深い。

「……ちなみに、

青は炎や水を出したり等の『外部への干渉』。

緑は空間を歪ませたり、障壁を作りだしたり等の『空間への干渉』。

黒は魔物を召喚したり等の『異界への干渉』。

白は傷や病気を治したりなどの『状態への干渉』だ。わかつたな

?

流暢に言い終えた。

……なかなか親切だ。

「はい。なるほど……知りませんでした」

フィンの率直な感想を聞いて、彼女は誇らしげに鼻を高くした。
もしかしたら、案外単純な性格なのかもしれない。

「さて。ここまで質問はあるか?」

「あ、はい。あの……俺も訓練すれば使えるようになりますかね?」
細腕の女性が、怪力の魔物を倒してしまったらしいだ。独学で戦闘
術を学んでいたフィンには、なんとしてもモノにしたい力だ。

「んー……。やはり才能や潜在魔力が関係する。が、初步的なもの
なら馬鹿にも覚えられんことはないだろ」

また『馬鹿』の部分を強調する。軽く殺意が芽生えてきた気がする……

かね?」

自分に傾いた流れを止めないため、すぐに次の質問をする。

「また質問か。しかたないな。んー……わかり易く言つと、『アジ
ト』だな」

文句を言いながらも、またもやちゃんと答えてくれた。
だが、アジトと言わなくてもピンとこない。

「『アジト』って、なんのですか？」

「はあ、まつたく。馬鹿かお前は。それくらい自分で……」

また、馬鹿と言われた。

(この女……！…)

込み上げる何かを必死で押さえ込む。

「あ、すいません。じゃあ、ここはシオンなんですか？」

「そうだ。まつたく。これだから馬鹿は……」

と、そこでついに堪えかねたフインが声を上げる。

「ああああーー！もうーー！」

強烈に怒気を含ませた声を出し、立ち上がった。

四時間も正座をさせられ、説教された恨みが爆発してしまった。女性に向かって指を差し、睨み付けるように、

「あのな……いいか？俺の名前は『馬鹿』じゃない。フインだ。フイン・トライアルって名前があるんだ。いい加減にしろー！」

言い放った。

馬鹿馬鹿呼ばれるのはあまり気のいい事ではない。長い間説教を受けた恨みか、口調が乱暴になっていた。

「む……」

いきなりの反撃に戸惑ったのか女性が言葉に詰まる。

「そつか……。そうだな。すまなかつた。私はシヴァ・リアスだ」あまりに素直に返してきたため、フインは拍子抜けしてしまった。そんなフインを尻目に、手で口元を塞ぎ、先程までは見せていたかった哀しげな表情をした。

「そうね……。何もわからない人を正座させて……。私はダメな人間ね……」

今にも泣きだしそうなその声に、フインは慌てて訂正する。

「あ、あ、いや、そんなことない、そんなことない！『ごめん、俺が悪かつたよ……だから……』

「ふん。スキあり」

「え？」

鈍い音と共に、フインの悲鳴が部屋中に響いた。

「悪いがお前みたいな恩知らずに説教される気は毛頭無い。この部屋に泊めてるだけでも有り難いと思え！ シネ！」

吐き捨てるように言つと、彼女は部屋を出ていつてしまつた。

ドアが壊れんばかりの音を出して閉まる。

フインはベッドの上であっけにとられていた。

「え……？」

先程よりも腫れ上がつた右頬を擦りながらフインが声になるかならないという音を洩らした。

部屋の中の静寂が痛い。

フインの心に理解しかねる寂しさが宿つてしまつた。

しばらくは寂しげな表情で部屋のドアを見つめていたが、

「……あ、でも説教終わつた！ ……ま、結果オーライだな」

自分に語りかけ、大きく伸びをしてベッドに寝転んだ。

身体を丹一一杯に伸ばすと、先程の寂しさなど一気に吹き飛んでしまつた。

解放感か、はたまた達成感か何かが自分の体を走り抜けてゆくのが、とてもすがすがしい。

「あ、でもまだ聞きたいこと残つてんだよな……ま、いいか。後で謝つとこ」

そんな独り言を呟いて、今は、この最高に気持ちのいい一時を存分に楽しんだ。

静かな夜だ。

昼間から夕方にかけての、騒がしい時間が嘘かと思えるほど、静かな時間をフィン・トライアルは過ごしていた。

フィンの故郷であるコスカリアの夜も静かだった。ただ、コスカリアのは虫の音だつたり動物の泣き声だつたり、とにかく生き物の音が聞こえていた。

今、フィンの耳に届くのは、ときおり弱々しく窓を揺らす風の音だけだった。

生き物の気配がしない、『死んでいる』静けさだ。

これからどうなるんだろう？ そんな事を考えさせられる夜だった。

故郷を離れてまだ間もないが、早くもホームシック気味であった。

静かな夜は淡々と過ぎていった。

天井に下げられた明かりが、部屋中を照らしている。

ベッドに身体を沈め、天井を見ていたフィンはその明かりに目を移した。

天井にかかつたそれは眩しいまでの光を放ち、部屋中に光をもらっている。その物体はフィンの知るかぎりではランプというものだ。

形 자체はごく一般的なもので、故郷で見ていたものと同じだが、フィンが不思議に思ったのは中で輝く光だつた。火のように心細くゆらゆら揺れる光ではない。火花のように鋭く視覚神経を刺激する、力強い光だ。

その光は、田舎者のフィン的好奇心をくすぐるのに十分な魅力を持つていた。

フィンはベッドから体を起こし、ランプのすぐ傍に立つ。

この不思議な物体を、自分の興味のおもむくままに触れてみるか、人の目を気にして見るだけにするか……。フィンの心の中で子供と大人が葛藤を始める。

見た目は花火のようだが、よもや触つて害のあるものではないだろう。

最初はただ見上げていただけフィンだったが、内に秘める好奇心が自制心に勝つたようだ。

眩しく光るランプを人差し指で警戒しつつ触つてみたり、蠟燭の火を吹き消すように息を掛けたりした。人差し指で触れた光は、触ることは出来なかつたが何となく冷たく、その光に息を吹き掛けても蠟燭のように揺らぐことはなかつた。

（魔法で動いてるのかな……）

魔法というものの存在は知つていたが学校ではならわなかつたし、今まで見たこともなかつた。

しばらくは、その明かりを自分なりに考察していたが、所詮は魔法の知識に乏しいフィンだ。答えに辿り着くのは無理なことだつた。無駄な考えを一通り巡らし、考へても仕方がない事を考へても意味はないと氣付いた。

意味の無い事はしない方がいい。小さい頃に学校で習つた事だ。

それに、こんな田舎者だとと思われる行動を謹むべきだとフィンの中の大人が諫めた。実際に、フィンは魔法学に乏しい村に生まれた田舎者だが。

魔法の事は後で誰かに詳しく聞いておく必要がある。

シヴア以外の人。

気持ちを切り替えるためにランプから目を離し、視線を足元に向けた。

「さて……」

誰に言つでもなく眩き、目を瞑つた。

頭の中から今まで得た情報を探し出し、まとめようとしたからだ。

今、わかっている事は、ここが何かしらのアジトである事、この街には魔法学が発達している事、シヴァーという女性が恐ろしく怖い&強いこと……。

ふとシヴァーの恐ろしい剣幕を思い出し、かばつように殴られた右頬を撫でた。

フインはシヴァーの事を思い出してみる。

綺麗だ、と最初はそう思つた。だが、残念な事にどうにも性格が悪すぎる。自信家で傲慢。乱暴者だし、おまけに説教も長い。

(まったく、あれが怪我人に対する……)

そこまで呟いてみて、頬に違和感を感じた。

……痛みが無い。

はたかれて殴られた頬。先程までは確かに痛みがあつたはずなのに……。

今まで気付かなかつたが身体の痛みも消えていた。蜥蜴型に痛められた身体が、普通なら立つことさえもできないぐらいなのに……。(どうなつてんだよ……もしかして、これも魔法の……?)

情報をまとめるつもりが、また謎が増えてしまった。

しかし、謎が増えたことよりも状況を理解できない無知な自分が腹立たしく思えた。

(しかたない。今度誰かに聞いておくか……。シヴァーは……無理だな。だつて……)

そんな事を考えていると、ふいにフインの胃が低く鳴った。

そういうえば、しばらくの間何も食べていない。いや、フインが何日間眠つていたのかは定かでは無いため、『しばらく』なのかさえもわからないが、とにかく腹が減つていた。

ここがもし団体のアジトならば、シヴァー以外に人がいるのかもしない。

人がいるのなら何か食べ物をもらえる可能性はある。

しかし、シヴァーが所属するような団体と考えると、ちゃんと食べ物を貰えるのか不安になつてきた……。

たが、いくらここで考えていても魔法についての疑問が解ける訳でも、食べ物が届くわけでもない。

……いや、普通なら食べるもののぐらに届くはずなのだが、どうやらここは普通の分類では無いらしい。食べ物が届くかに関しては諦めるしかない。

わかつてしたことだが、一応ため息を吐いた。

と、また急かすかのように腹が鳴つた。

(しかたないな……)

フィンはドアから顔を出した。冷たい空気が顔をさす。

左を見ると石の壁、右を見ると石造りの廊下が見える。どうやらフィンのいた部屋は、この階の一一番端の部屋らしい。

顔だけ出して周囲に人がいないのを確認し、静かに部屋を出た。なにも後ろめたいことはないはずなのに、まるで夜逃げでもするかのようだ。

石造りの廊下は冷たい空気が充満しており、瘦せた身を震わせた。予想以上に寒い。

足音を立てないように誰もいない廊下を歩く。廊下には一定の間隔で先程のランプと同形の明かりが掛けられ、暗い通路を明るく照らしている。

嫌に静かだった。周囲には自分の小さい足跡だけが響き、狭い空間の心細さを一層搔き立てる。

自分の吐いた息がランプによって白く照らされた。

(寒い……)

今、シオンの季節は冬だ。

冬の気温は薄着をしているフィンには少々肌寒い。

両手で身体をさすりながら歩いた。

部屋の中に居た時は寒いなんて考えもしなかった。もしかしたら、魔法の力で部屋を暖めていたのだろうか。

……非常に便利だ。

そんなことを考えながら長い廊下歩いていく。

いくつの部屋の前を通り過ぎただろう？ 左側に続いていた石造りの壁が、急にぽつかりと口を開け、結構な落差のある下り階段が見えた。

人一人が通れるぐらい狭い階段の先には明るい空間が広がり、そこからは、かすかに洗い物をしている音が聞こえてくる。

（この下に誰が居るのか……）

その音から察するに、残念ながら夕食は既に終わってしまったらしい。

夕食の残りはあるだろうか……。

家庭的な優しい音を聞いていると、そんな事を考えるだけの余裕ができた。

たが、すぐにここが見知らぬ人々のアジトである事を思い出し、余裕は無残に搔き消えてしまった。

人見知りをする性格ではないが、さすがに今は緊張してしまう。もしかしたら、この先にいるは悪い団体で自分を助けたのは雑用係として一生口を使つため……シヴァの性格を考えるとそれを否定できないのが悲しい。

そんな事を考えながら階段の先を不安げな表情で見ていた。

ここまで来ては覚悟を決めるしかない。

フィンは一度唇を噛み、逃げたくなる気持ちを抑えると、固い石段をゆっくり一段ずつ下りていった。

窮屈で急な階段を一段下りる「」とに視界が明るくなつていくが、同時に身体も重くなる。ふらつきそうになる身体を支えるために、壁にもたれながら階段を下りた。

顔を伏せ、良い団体でありますように……と珍しく神頼みなんかをしてみる。

……長いようで短かった階段はあっけなく終わりを告げてしまつた。

最後の段を下り、開けた空間に足を踏み入れた。途端、今までの寒さが嘘のような暖かい空気がフィンを包み、その暖かさに少しばかり気が楽になった。

顔を上げ、最初に目に入ったのは横に長いテーブルだった。部屋の広さから察するに、どうやらここはリビングのようだ。

横に長いテーブルには一人の人物が腰を下ろしていた。

向かいに座っている人物は新聞を読んでいる。新聞に隠れて顔は見えないが、短い茶色の髪が見えるためおそらくは男であろう。白く細い煙草の煙が立ち上っている。

こちらから見て二つほど左の席では、白髪の人物がテーブルに突つ伏している。眠っているのかはわからないが、またもや顔が見えない。こちらの人物は性別不明だ。

広いリビングにはこの一人しか見当たらない。

耳には、陶器の触れ合う軽く高い音と、水の流れる音が届く。聞こえる音はそれだけで、人の話し声などは聞こえてこない。なんだか、異様に重苦しい空気がフロアを包んでいた。

と、新聞を読んでいた男性が顔を上げ、こちらを向いた。

角張った顔は茶色く、弛んだ目元は黒縁の眼鏡と合わさり、なんとなく軟派な印象を受ける。30～40代だろうか。

「セリカちゃん。この少年に食べ物を持ってきてあげなさい」

煙草をくわえたまま男が言った。顔どおりの軟派な口振りだった。「はーい」

食器を洗う音の聞こえる場所から声が上がった。セリカと呼ばれた女性の声は、シヴァとはまた違つた若い声だつた。

こんなにあつさりと目的の食べ物が手に入つた……。

(意外に友好的だな)

と、思つたが、

(いや、もしかしたら油断させておいて……)

とも思えた。

警戒し固まつてゐるフィンを見て、男が少し笑つた。弛んだ目元

がさらに弛んだ。

「おつかれさん。シヴァの説教は長かつたろう。……んまあ、なんだ。あれも彼女なりの……なんていうか、スキンシップだ。どうも人間関係に慣れてないらしくてね。不器用なんだ。勘弁してやってくれ」

男は口元に皺を寄せながらこちらに眼を向けている。

四時間にも渡るスキンシップを受けたのは初めてだ。だが彼女の不器用感は確かにあつた。

だが、それが長々と説教＆暴力を振るつた理由とは到底考えられない。

返事をしないフィンに、男はさりに話し掛けた。

「まあ、そんな警戒なさんな。なんのためにこのシオンに来たのかはわらかんが、ま、泊まる宿も決まってないだろう、今晚はうちに泊まりなさい。……つと、なんて名前だつたか」

「……フィンです」

フィンは笑みを浮かべる男を見つめたまま名乗った。

悪い人では無さそうな雰囲気だが……。

「そうか、フィン君。申し遅れたが私の名前はラストーク・グレゴリー。この『リレイズ』というギルドの団長をしてい』

ラストークは新聞を折り畳み軽く頭を下げた。

それにつられてフィンも軽く会釈した。

「あの、ラストークさん……」

「ラステイで構わないよ」

「あつ、はい。ラステイさん……泊めてもらえるは感謝します。でも……」

フィンの言葉はそこで途切れた。

「怪しい団体では決してない。そんなに警戒する必要はない」

横から入った女性の声に悶ざされたからだ。

視線を声が聞こえた方向に向ける。

そこに立っていたのは、黒い長髪、整つた顔に鋭い目つき……フ

インの脳裏にいやな記憶が蘇る。

……乱暴で説教好きなシヴァだ。

彼女は相変わらず、人を見下すような目でこちらに見ていた。

フィンの長い夜が幕を開けた瞬間だった。

フィン・トライアルは女性が苦手だ。理由は、まあ、何となく、だ。

18年の人生の中でも、まともな会話を交わした女性なんて亡き母親と妹、それに昔仲良くしていた幼馴染みの女の子ぐらいなものだ。

フィンの内向的な性格が原因、なのかもしれないが、とにかくフィンは女性が苦手だつた。

起きていきなりに説教された時も、飄々としてはいたが実際は居なくなりたい程気が重かつた。説教の後半の方は、もうどうでもよくなつてしまつたが。

「ごく一般で平凡な人生を送るのなら、女性との接触を拒絶して生きることは可能だろう。

だが、フィンがこれから送るであろう人生は、ごく一般なものでも平凡なものでもない。父親、そしてあの仮面の男を捜し出さなければいけない旅だ。

人を捜す際に一番大切なのは、情報、つまり他人との関わりだと尊敬する祖父が教えてくれた。

だから、シオンに行くと決心した時、この先多少なりとも他人との関わりがある事は承知していた。

……はずなのだが。

フィンは粉っぽいパンを手でちぎり、乱暴に口に入れた。

味わうように口の中で転がしてみると、パサパサしてて美味くも不味くもない。

ただ、乾燥して堅くなつてしまつていてるためか、なかなか飲み込めない。

木の根でも噛んでる気分だ。

昔祖父に聞いた言葉を思い出した。噛むという行動は胃の満足感を増幅し、少量でも満腹になる事ができる、と。

そう考えると、空腹状態にあるフィンには幸運な事なのかもしない。

柔らかくなるまで噛み碎いたパンを飲み込み、テーブルの上に視線を落とした。白い丸皿の上に、パンが一つ乗っている。

フィンに与えられた食料は、今持っているパンと皿に乗っているパン、合わせて三つのパンとコーヒーだった。

食料を持ってきたのがシヴァだつたのは意外だった。

『今はこれしかない』

そう言って、不機嫌そうな顔で運んできてくれた。

見ず知らずの旅人に食料を分け与えるなど少々疑わしかったが、今のところ異常の見られないフィンを見ると、どうやら毒は入っていないようだ。遅効性の毒を盛られたのかもしれないが、なるべく考え無いようにした。

シヴァは今、フィンの左の席に腰掛け、時折横目でこちらの様子をうかがっている。

フィンは一口大にちぎった一切れ目のパンを口に放り入れ、

「俺、コーヒー飲めないんだよなあ……」

と、シヴァに聞こえるようにわざとらしく独り言を洩らした。フィンがコーヒーが飲めないのは事実なのだが、隣に座る女性の機嫌をとろう、という考え方があった。

いや、なぜ自分がこの女性の機嫌を取らなければならぬのか？ 大体この女性は何を怒っているんだ？ とも考えたが、口に出してしまつたら取り消しはつかない。

女性の目を見るのが苦手なので、こちらを見ているシヴァの目を見ないように目を瞑つた。

暗い世界に落ちると視覚の代わりに、聴覚が研ぎ澄まされる。

いつのまにか食器を洗う音が止んでいた。

「その歳で「一ヒーも飲めないのか？……と、呴つてほしいのか？」

シヴァの人を小馬鹿にするような声がした。
まったく、気に障る言い方だ。

「別に。……大体、何でそんなに不機嫌なんだよ」

パンを噛みながら疑問を投げ掛けた。

フィンの瞳は閉ざされたままだ。

「簡単なことだ。お前が人の話を聞いていなかつたからだ」「聞いてたよ」

「聞いていた、というのは半分は嘘だつたが、半分は本当なので問題はない。自分のなかでは。

「いや、聞いていいな」「聞いてた」

即答するフィンに少しだけ、シヴァの声がいらっしゃった。

「嘘をつくな。お前は聞いていなかつた」

「嘘じやない。俺はしっかりとこの耳で聞いていた」「自分の耳を指差した。

進展の無い会話は、はたから見ると子供の痴話喧嘩みたいだ。

本来なら女性は苦手な筈なのだが、なぜか苦にはならない。彼女の口調が男性みたいだからなのだろうか。それとも……

「聞いていたのなら、私が何と言つていたのか言つてみる」

フィンの考えはシヴァの問い掛けに閉ざされた。

ちぎつたパンを口に入れ、顔を少しだけ下に向けて記憶をさかのぼる。

「ん~、蜥蜴型の強さと戦い方、俺の未熟さ、自分の自慢話、あと、魔法について少し……」「頭のなかからひっぱりだした記憶を並べる。

「それ以外は？」

柔らかくなつたパンを飲み込むために少し間を置いた。

「…………わからん」

「ほらな。聞いていない」

シヴァの声は、呆れたような、ため息混じりの声だつた。

「まあ、抜けてる所もあるけど大体は聞いてたよ」

あんな長い話を全部聞いてられるか、と思つたが、面倒なので口に出さないことにする。

「そうじゃない。お前は一番大切な所を聞いていなかつた」

少しだけ声が大きくなつた。

声だけを聞いていると、なかなか表情豊かに聞こえる。実際の彼女の顔には、相変わらずの嫌味な表情が貼りついているのだろうか？ フィンは最後の一切れを口に入れ、もう一度記憶をさかのぼつてみる。

しかし、いくら考へても出てくるのは、シヴァの罵声と不思議なランプの記憶だけだつた。

「ん~、あんだけ長く話してたんだ。聞いてない所もある。致し方ない」

自分に言い掛けるように頷いた。

珍しく、シヴァが一瞬言葉を止めた。

「……そうか」

ほんの一瞬の沈黙の後に彼女から発せられた言葉は、どこか物悲しい言い方だつたが、女性に疎いフィンがそれを察知することはなかつた。

本当に声だけなら表情豊かだなあ、ぐらいにしか思つていなかつた。

一瞬寂しげな表情をしたのも、目を閉じていたためわからなかつた。

「……で、大事な事つてなんて言つたんだ？」

相手の様子になど、微塵も気付かないフィンに、元の刺々しい口調に戻つた。

「ふん、私は同じ事を一度言わない主義なんでな」

「……嘘つくなよ。飽きもせずに同じ事グチグチ言つてたくせに…

…

なるべく音量を低めにして憎まれ口を叩いた。

「知らんな」

「……そうですか」

白々しく肩をすくめた。

「それより、コーヒー飲まないんだろ？ もらうがぞ」

「ご自由に」

少しだけ嫌味を含めて言つと、だるそうに皿を開く。

コーヒーを手の甲でシヴァの近くに寄せ、二個皿のパンにかじりついた。

静かな時間が再び流れ始める。

堅いパンをうまく噛み切れず悪戦苦闘するフインを、コーヒーをするシヴァが視界の隅で冷ややかに見つめていた。

そんな視線を無視しているのか気付かないのか、フインは噛み切ったパンを噛み潰しながら、向かいの席に座っている男性を見やつた。

ラストール・グレゴワリー、そう名乗った男性は、新聞を弛んだ瞳で見つめてた。

よほどのヘビースモーカーなのか、テーブルの上に乗つている灰皿には、吸い殻が山のように積んである。

「ラスティと呼んでくれ」

と友好的な態度を取つてくれていたが、煙草嫌いのフインにとつて、煙草臭い人とはできればお近付きになりたくない。

そんな事を思いながら、何気なく男性の読んでいる新聞を見た。

（今日の新聞かな……）

目を凝らして見た新聞の日付は12月15日。最後に宿泊した村で日付を確認した時は、12日だった記憶がある。シオンの周囲を取り囲む森に入ったのは、その三日後だから……。

「……えつ

思わず上げてしまつた声に、ラスティが新聞から顔を上げた。

フィンが森に入ったのは12月15日、そして今日は12月15日。

魔法の力だろうか？あれほどの深手を負った体が半日でここまで回復する程、魔法の力は強力なのだろうか？

「……ど、どうかしたのかい？」

考えを巡らせていたフィンだが、ラステイの声に顔を上げた。驚きに満ちたラステイの表情を見て、しまった、と一瞬だけ思つたが、この際思い切つて質問をしてみる。

「あ、あの、俺ってどれぐらい寝ていたんですか？」

自分の声が震えてるのがわかつた。シヴァとの会話の時の元気は一体どこに行つたのだろうか……。

と、コーヒーをすすつていたシヴァが横から口を出した。

「364日だ。明日でちょうど一年になるな」

なんて驚愕の一言をさらりと言つもんだから、

「…………え、え…………！」

フィンが言葉の意味を理解するのに約三秒の時間を費やした。そして、自分でも驚くほどの声を上げてしまつた。

あまりの声の大きさに、事の原因をつくつたシヴァが驚いた表情をして声を上げる。

「ば、馬鹿！冗談に決まつてゐるだろつ！何をそんなに大きい声を……！」

シヴァは自分を落ち着かせるように、持つていたコーヒーを一気に飲み干した。

この無表情で固そうな情勢が冗談を言つとは思つていなかつた。確かに、冷静に考えると有り得ない事だ。大人氣ない大声を上げた自分が恥ずかしい。

「……あ、はは……そうだよね……『ごめん』

フィンは顔を俯かせて言つた。

とりあえず謝罪してみたが、なんで俺が謝らなくちゃいけないんだ……とほんの少しだけ後悔した。

隣に座る女性を見た。

シヴァのあまりの取り乱しぶりはなかなか興味深かつた。白かつた顔は赤く紅潮し、細い目は忙しなく宙を彷徨つていて、明らかに動搖した表情だつた。

初めてみるシヴァの『女性としての表情』だ。

そのシヴァの表情を見ていたラステイが、隠し切れていない笑いを滲ませて言つた。

「シヴァ……顔が面白いことになつてゐるぞ」

薄ら笑いを浮かべるラステイに指摘され、シヴァの顔が一瞬引きつる。

「つるさい！」

一際大きな声を上げた。コーヒーカップを乱暴にテーブルに置き、固い動きで立ち上がる。

それを見ながら、フィンが内心で微笑んだ。
(意外と……なんかこう……かわ……)

直後、聞き覚えの有る鈍い音と共に、フィンの脳天に重い衝撃が奔り、意識が、少しづつ、薄れて……いつ

「醜い……」

背の高い建物の上、眼下に広がる光景を見ながら女性が呟いた。シオン・フロント地区。王の住む街、シオン・セントラル地区を取り囲むように腰を据えるこの街は、広大なコウラの大陸に於いて最大の発展を遂げ、同時に最悪の醜態を曝していた。

一面に広がる広大な街は暗澹とした闇に包まれ、僅かばかりの家々から漏れる明かりが仄かに煌めいている。だが、その中にあって、歓楽街の一帯だけは凶々しく居座るかのように下品な光彩を吐き出す。深々と更ける夜を押し潰す毒々しい光は、そこに屯する輩共のむせ返るような欲望を具現化しているかのようだ。

穏やかな静謐を踏み躡るようなその光がたまらなく嫌いだつた。街の地面を舐め尽くすかのように密集する建物は、窮屈そうに無様に折り重なる。薄汚れた外壁には、いずれも異様な文様が刻まれていた。耐魔力塗装と呼ばれるその文様は歓楽街の派手な光と合わせり、不気味に浮かび上がる様は見ているだけで不快な感情と共に吐き気を催しそうだ。

狭い路地には粗末な格好をした浮浪者や、闇に紛れる夜盗が身を潜める。

残飯を漁り、悪辣な稼ぎを企てるその様はいかにも低劣で、一層この街の醜態を際立てていた。

シオン王国軍治安維持部隊、通称

「中央」

、第013隊隊長アスカ・エクシードは、眼下に広がる有様に細い眉をひそめた。

彼女が立つのはシオン・フロント南地区、ジェザイル時計台の最上階。地上から132メートルの眺めは、南地区の全てが見渡せる。さすがの邪氣も、この高さにあつてはその牙を立てることはできな

い。嗅覚を刺激するのは澄み渡った冬の匂いだけだった。

周囲の湖から吹く湿った風に、肩の辺りまで伸びる白茶色の髪が靡いた。細やかな音を立て、一本一本が上品に宙を泳ぐ。弾力のある生成色の肌は、空にたたずむ伏待月の光を写しそうな程光沢をもつっていた。

最小サイズの軍服さえ大きく感じる程華奢な身体や、幼さの残るやわらかい顔立ちから、まだ子供のようにも見えるが、眼下に向ける漆黒の瞳は霜夜のように冷たかった。

隊長という役柄とは似付かわしくない顔立ちと体付きだ。しかし、赤魔法を行い、戦闘に関しては中央でも高い技術を誇っている。腰に下げた刀も紛れもない銘刀だ。

異様に大人びた雰囲気なのは、彼女の育った環境が影響しているのだろうか。

欲と金と酒に塗れた街、シオン・フロント地区。

昼には大陸中から集まる人々が狭い路地にこじた返し、夜には尽きる事の無い欲望を吐き出す。

そんな街で、アスカは育つた。

8歳の頃、この街で拾われた。なぜ自分が捨てられたのか、以前はどこに居たのかなどの記憶は一切無かつた。だが、自分の名前が「アスカ」

である。それだけは覚えていた。

エクシードの姓を名付けてくれたのは、共にこの街で暮らしていった仲間達だった。

「優れるもの」

それがエクシードの意味だと教えてもらつた。

あの頃の仲間達は、大多数がこの街に飲み込まれ命を落とした。

生き残った者達も、今だにアスカと交流をもつのは一人しかいない。フロントでは、見るのは醜く、聞くものは煩く、嗅ぐものは臭く、食べるものは不味く、触るものは汚かつた。暴力が横行し、略奪が繰り返される、そんな汚れた世界だった。

それでも、仲間達と過ごした時間は……。

アスカは首を振った。内心の動きを否定するかのよつこ、額を押さえ、細い指を立てた。

そんなことを考えちゃいけない。

だって……今回の任務は……。

目蓋を強く閉じ、目線を再び下に向けた。

幼いながら高い戦闘センスを發揮していたアスカは、仲間の中でも一番年長だった男性と共に中央に志願した。

13歳という異例の若さで国王軍に籍を置くことになる。歳のせいもあり、まわりの大人からは卑しい目や嫉妬、卑下する目で見られることがあつたが、セントラル地区での生活は今までが嘘のように感じられた。見るものは透き通り、聞くものは澄みきり、嗅ぐものは芳しく、食べるものは味深く、触るものは纖細だった。

フロントは対照的な世界。

壁を一枚挿んだだけで世界はここまで変わるのか。子供心に嬉々とした驚きを感じた。

フロントとセントラル。いつから区別されるようになつたかは定かではないが、正反対の二つの世界を隔てるのはたつた一枚の壁だけである。

「アレクスの壁」

悪政を敷いた時の国王が、国民の暴動から王城を守るために王城の周囲に建設した。この壁は、その存在意義を存分に果たしているが、フロントとセントラル、二つの世界の貧富の差を広げる結果となってしまった。

それが良い事なのかは知る由もないが、ただ、この街を訪れたたびに思うことがある。

「この街は……醜い」

アスカは、任務のためにフロントに来る時は大体この時計台に登る。汚濁した空気に触れぬよう、幼少期の浅ましい思い出に脚を掬われぬよう。

卑下する視線を眼下から外し、左のポケットから4枚の写真を取り出した。

自分の手と同じぐらいの写真を、寂しげな表情で見つめる。これが今回の任務の標的。

ラストール・グレゴリーの捕縛。同時に、彼の結成した「リレイズ」

の構成員三名の拘束。それがアスカに与えられた任務であった。構成員三名の内の一人は、かつて共にフロントで生活をしていた仲間、シヴァ・リアス。少時のアスカに多大な影響を与えた、昔のアスカの最も尊敬する人物であつた女性。だが、今はセントラル、そしてアスカの敵……。

「シヴァ……」

道を違えた仲間を悔やむように、凍みた声を洩らした。

しばらくは黒髪のその女性を見つめていたが、暫しの追憶を終えると意を決したように目元に力を込めた。寂しげな表情を押さえ込み、戻ることのできない過去を振り払うように刀の柄を右手で握つた。そして、4枚の写真を空中に投じた。

途端。

短い摩擦音と共に、白刃が鞘を走った。鞘から解き放たれた抜き身は、写真目がけ一直線に翔んだ。一枚を打ち抜き、間髪を入れず返す刀でもう一閃。打ちおえると刀を鞘に納めた。

刹那の早業に、4枚の写真はどれも二つに裂かれていた。吹き付ける冷風に、裂かれた写真が宙に流される。

霜夜の瞳を8枚の写真に向け、静かに目蓋を閉じた。

「シヴァ……悪いのは、貴女の方」

誰に言つてもなく呟くと、ゆっくりと目を開き愉悦そうに口元を

歪ませた。

写真が夜の闇に紛れ見えなくなつた。過去に別れを告げ、気持ちを切り替えるように軽く屈伸をする。

同時に、アスカの身体より赤い煙が立ち上り始めた。紅色の光が皮膚より湧き出るかのように薰り、暫し空中を彷徨つた末、空に焼き消える。

煙草の煙のようなこの光は、赤魔法の発動の証だ。全身の細胞に魔力を注ぎ込み、一時的に身体能力、あるいは思考能力、五感能力を上昇させる魔法。

細胞に入りきらなかつた魔力は空氣中に流れ、まるで煙が立ち上つているように見える。それが、この光の正体。

アスカの身体を魔力が満たし、段々と動きが軽くなつていく。フロントの空氣を浴びるのは少々気が進まないが、任務ならば仕方がない。

「
跳躍」
フカルム

一度だけ空を見上げた。爛々と輝く月、空を埋め尽くさんばかりに瞬く星は、アスカの旅路を祝福してくれていよううだった。

(シヴア。あの時貴女が私たちと共に来てくれたのなら、こうはならなかつたでしよう)

心の中で告げると、遙か下方に臨む街に身を投じた。

何もない白の中に居た。気を緩めると吸い込まれてしまつそうな、そんな世界だ。

この空間は際限なく広いのか、それとも手を伸ばせば触れることが出来るほど狭いのか、それさえもわからない。

音も、臭いも、肌に触れるものも何も無い。いつたい、自分はいつからここにいるだらうか。

気持ちが悪い。

この世界から逃れようと瞳を閉じても、その田に映るのは白だ。深々と降り積もる雪のよひな、寒夜に吐く息のよひな、乾いた空に掛かる雲のような白。

この空間に溶け、心」と同化してしまふそうだ。

田蓋を開けているのか、田蓋を閉じているのか、瞬きをしているのかもわからない。

空はどうだらう? 地面はどうだらう? 北は、南は、東は、西は?

自分は地に立っているのか? 宙に浮いているのか?

(ここは……どこだ?)

こゝら辺りを見渡しても、その瞳に映るのはいい加減見飽きた田だ。

この不毛な時間が堪え難い。やることが無いと、嫌な記憶ばかりが甦つてくる。だから暇な時間は嫌いだ。

そうだ、寝よう。寝るのが一番いい。今日は色々あつたからな。疲てるんだ。寝よう、寝よう。

真っ白つてのが少々気になるが、頑張りつ。

……。

田を開いた瞬間。フィンの視界を女性の顔が覆つた。

「うわあっ！」

いきなりの大接近に、恐ろしいものでも見たかのような叫びを上げてしまった。天敵に襲われた猫よろしく身体を飛び起すと、遮二無二走りだし部屋の壁に背中を合わせ張りついた。

「なんですか？ 人を化け物みたいに」

フィンの顔を覗き込んだ女性が、赤みを帯びた健康そうな頬を膨らませた。浅葱色のミディアムヘアーに、やや丸く、愛敬のある顔立ちを持つている少女だ。田らな瞳と合わせ、一目でまだ十代だと認識できる。

「あ……いやあ……」

フィンは氣まずそうに視線を逸らした。壁に磔になつた身体は微かに上気し、四肢は蠍人形のように固まつてしまつていて。

「人に看病してもらつたんだから、ちゃんとお礼を言わなきゃダメよ」

少女は黄金色の瞳でフィンを見つめたまま、母親のような口調で諫めた。

「人に看病」

。その言葉に、フィンは自分の置かれている状況を少しづつ思い出しだ。

「Jijiはギルドだかいう怪しい団体のアジトであること。そして、自分はシヴァの理不尽な暴力を受け氣絶してしまつたこと。

……シヴァの事を思い出す度に、嫌な気分になつてしまつ。

しかし、この少女が自分を看病してくれたというのなら、ちゃんとお礼を言わなければなるまい。

「あ、ありがとうございます」「Jijiです」

一応、敬語を使った。

フィンは今18歳。父親の手掛けりを見つけに来たこの地で、明らかに年下の少女に説教を受けるとは夢にも思わなかつた。ある意

味シヴァの鬼説教より屈辱的だ。

胸の内を曇らせたが、表情には出さないよう努めた。

フィンの言葉を聞いた少女は満足そうに頷き、両手を腰に当て胸を張った。いかにもな子供の動きだ。

「よろしい。私の名前はセリカ・フリルレイ。年は16歳。このギルド最大の功労者よ」

鼻高々に言い切る。

（フリル……？なんか言いにくい名字だな）

と、どうでもいい事に興味を持つてしまった。フィンは直ぐに考えを切り替える。

この少女、自分のことを自分で功労者と言った。これは、なかなかの自信家らしい。

……それでも、シヴァのような性格破綻者（仮）に比べれば全然まともだが。

しかしリレイズだかいうこの団体、年端もいかないこの少女を団員として雇っているとなると、いよいよ怪しくなってきた。シヴァだってフィンと同年代か少し上ぐらいの年齢だらう。

少し離れた場所にあるテーブルに座っている、団長と名乗った男性に視線を向けた。と、同時に彼の緩んだ口元から言葉が発せられた。

「ま、立ち話もなんだ。ゆつくり座つたらどうだい、お一人さん」

世間話でもしているかのような口振りだ。

この男性、ラストールと言ったか。他人のやり口に非を唱える気はないが、何故この団体を立ち上げたのか聞きたいものだ。

フィンは警戒しつつも、とりあえずラストールの言う通り、彼の向かいの席に腰を掛けた。彼の隣の席では白髪の男性が机に突っ伏している。

先程の少女、セリカはフィンの左隣に腰を下ろした。フィンは意識的に、逃げるように椅子を右に寄せた。

「この団体について、魔法について、この街について。シヴァから

聞いた限りだと君の知りたい情報は、この辺りかな？」

ラストール、いやラステイが、悪巧みを考えついた子供のような笑みを浮かべた。

フィンにはラステイの不敵な表情の意味を読み取る力はない。だが、彼が自分の求めている情報を与えてくれようとしているのは、なんとなくわかった。

「……はい」

フィンの返事を聞き、ラステイは再び嬉しそうに微笑んだ。
「そうかそうか。じゃあ、俺が何でも答えてやろう。まず何から聞きたいたい？」

怪しい。とフィンは咄嗟に感付いた。

見ず知らずの人物を無償で助け、食物を与え、情報まで与える。この男の考えに表面的なながらもフィンの脳裏が警告を発した。
「じゃあ、聞きます。なぜ……『何でも答えてやろう』と思つたのですか？」

フィンは猜疑心を隠し切れない瞳をラステイに向けた。

その視線と言葉を向けられた相手は、少しだけ肩をすくめる。「まったく。そう警戒なさんなつて。だが、まあ、いいだろう。なぜ何でも答えてやろうと思つたのか、教えてやる」

ラステイは声を潜め、内緒話でもするのか身をのりだす。そして、ゆるんだ顔を引き締め、真剣な顔を作った。

「現在、リレイズの構成員は4人しかいない」

ラステイは右手の指を4本立てる。4人、という意味合いだろう。

「まず、団長である俺」

左手で右手の人差し指を折つた。

「次に、セリカ・フリルレイ」

「はいっ」

隣に座るセリカが楽しそうに声を上げる。

ラステイは、その声に頷くと、今度は中指を折つた。残つた二指の内、薬指を差し、少し表情を曇らせた。

「そして、君のよく知るシヴァ・リアス……なんだが。彼女は短気かつ暴力的で、さらに頑固でねえ。ま、見かけに寄らず単純だから、扱いやすいといえば扱いやすいんだが……」

「でしょうね」

フィンは全面的に同意した。まつたくその通りである。出会ってまだ数時間しか経っていないのに、彼女の性格は大体掴めてしまつた気がする。

「しかし、赤魔法の扱いに関してはシオンでもトップクラスでな。あまり文句を言えないんだ。なんせ、いつ殺されるかともう、毎日ヒヤヒヤ」

「おー、恐い恐い」

ラステイとセリカは大袈裟に身体を震わせた。

……まあ、わからない事でもないが。

空々しい演技を終えたラステイは、隣に座る白髪の男性を横目で見つつ残された小指に触れた。

「で、最後の一人が……」

「どうも、アルフレッド・ラステイールです」

いつのまにか体を起こしていた白髪が眠そうな声を出した。

その声に、ラステイの体が一瞬飛び跳ねる。

「アルッ！ お前いつのまに起きてたんだ！？」

「シヴァの糞やかましい声で目を覚ました」

と、一驚を喫しているラステイを尻目に、寝ているのか起きているのかわからない顔で言った。

意外に若かった。フィンより少し年上ぐらいだろう。年に似合わない白髪頭は何か病気なのだろうか……。

「まったく。シヴァは声がでか過ぎるんですよ。こんなんじや、ゆっくり昼寝もしてられない」

男性は腕を組み、眠そうな眉間に皺を寄せた。

「つて、アル、あなた朝からずっと寝てたじやない」

と、セリカが呆れた声で咎めたが、相手の男性は聞こえてないの

か意図的なのか無視する。

「眠いなあ、寝足りないなあ……」

「まったく、あなたつていつも寝てばかり。ギルド団員として少しあは……」

「団長、今何時でしよう?」

セリカの言葉を遮り、白髪の男性は自分より少し背の高いラスティを見上げた。セリカの言葉に耳を貸さないのは、わざとなのか、それとも単に聞こえていないだけなのか。

「ん? 今は6時ぐらいじゃないか」

「はあ……。食事、洗濯、掃除。いつもやるのは私だけ。それもこれもあなたが……」

「6時ですか。それは、久しぶりに寝すぎたかも知れませんね」

「成長期の女の子にそんな重労働をさせ……」

「お腹すいたなあ」

「るのは大人の男性としてのエチケッ……」

「食べ物何かあるかなあ」

自分の話を聞かない白髪の男性に、セリカの顔が桃のように紅潮し膨れていた。丸顔がより一層丸くなる様は、滑稽にも愛らしく見えた。だが、彼女の鋭い視線はアルと呼ばれた男性を今にも貫きそうな程だ。シヴァの様な刺々しさは無いが、人としての罪悪感を刺激するような鋭さだ。

そんな視線に見向きもせず、男性はフインの方を見て軽く会釈をした。

「……アル。あんた人のはな……」

「あ、改めまして僕の名前はアルフレッド・ラステイールです。みんなにはアルって呼ばれてるんで君もアルって呼んでくださいね。趣味は昼寝、特技も昼寝。毎朝6時に起きて夜8時に寝ます。早起きつていいですよ。得意な魔法は青。ちなみに僕、この街で数少ない緑魔法の使い手なんですよ。子供の頃は神童と呼ばれて白黒緑の三大魔法を下級ですけど使えたりしたんですよ……あ、君の

傷を治したのは僕ですよ。白染灯つていつ道具を使いましてね。患部に照らすだけで白魔法を使えなくても驚くほど、って言つても魔法わからないんだつけな？あの、魔法には一般的に……」

「ああー！ つるといつるわこいつをこー！ 何!? アンタ!? 何!? え? 何で私の話を無視するの! ? 私に喧嘩を売つていらっしゃるの?」

セリカがついに癪癩を起こし、部屋中に響き渡る叫び声を上げた。
ちょっと言葉がおかしいが、どうやら度重なる無視に堪忍袋の緒
が切れたみたいだ。

だが、残念ながら愛敬満天の顔を真っ赤にしても、どうにも迫力に欠ける。

「アーティはそんなセリガを新か子を見ながら、微笑ましい笑顔で見つめ、アルはわざとらしく両耳を塞ぎ

とヒステリックな叫び声を書き消そうとしている。こんな時でも、迷惑なのか眠いのか寝ているのかわからない顔をしていた。

ラステイが腫物を触るような口振りでなだめようとしたが、満面

朱の口とせりかは闇く耳を持たない。もはや闇を取る口とらでもない、金属の擦れ合ひのような甲高い声で何やら叫んでくる。

(ああ あだな事置いたいはいたい。)

尋常じゃないほど散らかった部屋を見渡して、フィンはため息を吐いた。

部屋の中には、猫背な背がさらに丸まるくらい重たい空気が充満している。

溜まつた不満を放出した少女の荒い吐息、問われた責任を逃れる青年の聞き取れない微かな咳き、一人分の責を負わされた男性の念佛のような力ない唸り。

今では三様の息遣いが耳に入るのみのリビングは、つい先程まで、耳を塞ぎたくなるような少女の甲高い声に満たされていた。

ラスティの必死の説得により場は落ち着いたが、通り過ぎた嵐が残した傷跡はなんとも痛々しい。

泥棒に入られた。そう言えば、大多数の人は納得するかもしれない。

棚からは吐き出したように生活用品がこぼれ落ち、簡素な陶器皿が無残に砕け床に散らばっている。フィンの食べていたパンは踏み潰され、シヴァの飲んでいたコーヒーは石造りの床に水溜まりを作っていた。

セリカとかいう少女が、半時間に渡り派手に暴れ回ったのがすべての原因だ。

一体、これを片付けるのは誰なんだろうか。つい、そんなお節介な事を考えてしまう。

「まあ、なんだ」

ラスティが切り出し、籠つた咳払いを一つ。

フィンよりも一回りほど大きい両手をテーブルにつけ、ゆつたりと頭を下げた。

「迷惑をかけてばかり、申し訳ないね……」

頭を下げるまま言った。その言葉に最初の頃のお茶濁れた軽さは

無く、重たいが落ち着いた、大人の気品のよつたものが感じられた。

「いや、そんな……」

その改まつた謝罪に、一応、否定をする。

だが、実際非常に迷惑であった。セリカの金切り声は耳が痛くな
るほどひるさかつたし、皿やら椅子やらが飛び交う戦場と化した室
内は、下手すれば死んでいたかもしれないほど危険極まりなかつた。
生きているのが不思議なぐらいだ

まったく、一体自分が何をしたのだろうか。何のためにこんな目に遭わなくてはならない。蜥蜴型に完敗し、延々と説教をくらい、
殴られて氣絶し、死にかける。

今日は超が付くほど厄日だ。不満だけが暗い心の底に沈殿していく。

こんな事を思うのはシヴァのせいでもあり、隣に座る少女・セリカのせいもある。

フィンの左側に腰を下ろした少女。まだ興奮が冷めないのか、荒い息の音が耳に届く。

彼女も一応は女性だ。異性が苦手なフィンにとって、相手が例え自分より幼い少女だろうと、耳に掛かるその音は思わず身をよじらせたくなるぐらいにむず痒い感じがしてしまつ。

上半身を反らし、耳を彼女から離そうと試みる。横目で見る少女は、右頬を膨らませ目線を下げていた。納得がいかない、という顔をしているように見受けられる。

いや、納得がいかないのはこちらの方だ。挑発したアルフレッドとかいう奴も奴だが、だからといってここまで暴れ回るのは問題有りだ。

「子供のうちは元気が大切だよ」

無神経そうな事を言つたのは事件を起こした張本人、白髪頭のアルフレッドだった。血の巡りが悪そうな顔を机に張り付け、俯いているセリカを面白そうに観察していた。

元を辿れば、セリカの暴走はこいつの挑発するような行動が引き

金ではないか。

彼は、この惨事の発端が自分にあるといふことを自覚していないのだろうか。フィンの中にある正義感みたいなものが少しだけ疼いた。

他人事に口を出すのは好かない性格のフィンだつたが、「面倒」と起こしておきながらこの態度はあまり気持ちの好いものではなかつた。

へらへらと節操の無い表情を見せるアルに視線を向ける。心の内が表にあらわれ、相手を睨み付けてしまわないように細心の注意を払う。

起きているのか疑いそうになるくらい眠そうな顔は相変わらずだが、波を打つように弛んだ口元は呆れに似た不快感を見る者に『え』る。

フィンもその不快感を受ける者の例外ではなかつた。

「アル、おまえも少しは反省したらどうだ」

頭を上げたラスティが、不謹慎とも言えるこの男を諫める。それでも、アルの間抜けた表情は変わらない。

「んあ、…………氣を付けます」

「氣を付ける、ではなく反省しろ、と言つたんだが」

「お？…………じゃあ、反省します」

「ふむ、反省しているようには見えないが？」

「そうですか？…………『じめんなさい』

「はあ…………もういい」

どうしてラスティは、このような人物を団体に入れたのだろうか？シヴァは（フィンの中では）恐ろしい程強いし、セリカは子供ながら、といつてもフィンと一歳しか違わないが、家事全般をやつてゐるらしい。一人とも多少の問題点はあるが、この団体にとつて有意義な存在なはずだ。だが、この白髪頭だけはなんとも謎だ。

顔の筋肉が抜けているのか、と思えるほど弛んだ顔は明らかに怠け者面だし、人形並の血色の悪さから見ても戦闘には不向きに思え

る。フインの見る限り、調子の良い時は思つままに喋り散らし、自分に都合の悪い事柄に関しては緩慢になる点に関しては長所とは思えない。

そんなフインの分析を知る由もなく、アルは眠そなあぐびと共に再び眠りについた。

「……フイン君、すまない」

ラスティが再び頭を下げた。

「いえ、そんなことありませんよ」

ギルドという団体が何を目的としているのかはわからなかつたが、団員に恵まれない団長さんを憐れに思つてしまつ。

眠りこけるアルを見つめたラスティは頭を抱え、言つた。

「本題に……移ろうか。見ての通り、私たちのギルドは人手が足りないんだな……な」

口調を軽く戻して言つと、目尻の下がつた特徴的な瞳をフインに向けた。

親に何かを頼む子供の……とまではいかないものの、何かを願うような彼の瞳がフインを見つめる。視線を逸らすことなく一点を見つめる純な瞳の意味を、フインの頭脳は容易に想像することができた。

「言いたい事、なんとなくわかりました。俺に、この団体の団員になれと言いたいのでしょうか？」

少女から離し気味にしていた身体を、元の位置に戻した。

「……」名答

一瞬間を置いて答えたラスティは少し嬉しそうな笑みを浮かべた。その表情に、少し前の悪戯を考えた子供のような笑みを思い出す。父親を捜すのがフインの目的だ。この街に留まつて親切にお手伝いなんてしている訳にはいかない。

命を助けて貰つた以上、礼はしなくてはならない。だが、今のフインに団員になっている余裕はなかつた。

「断ります」

答えは決まっていた。

……だが。この男の笑みを見ると、自分の考えが見透かされるようだ。なんとなく気に入らない。

「残念だな……」

頼みを断られたにも関わらず、ラスティは依然笑みを浮かべている。顎を擦りながら、わざとらしく、考え込む仕草をして言った。

「じゃあ、この街について教えてあげようか」

いつたい、何が目的なのだろうか。そんな疑問を持ったフィンに構わず、ラスティは続けた。

「この街には二種類の街がある。一つは、このシオンの国を統べるセントラル地区、もう一つは今俺たちがいるフロント地区だ。

で、セントラル地区はこことは違つて、えらい金持ちとか王族とか、とにかく気に入らない奴らが住んでる。でな、奴らはセントラルとフロントを高い壁で区切り、俺たちの住んでるフロント地区からは一切手出しができないようにしたわけだ」

何やら説明を始めた。せっかくなので何も言わずに耳を傾ける。

「セントラル地区の住民は強欲で傲慢なんだ。奴らは円形に造った壁の内側に住んでいい。壁を盾にしてな。そして、俺たちから法外な税金を巻き上げ、抵抗する奴には武力を行使してくる。反発しうにも、セントラル地区に逃げられたら越えられないでかい壁があつてどうにもできなくなるし、なにより奴らの軍隊がやたらに強い。戦つても勝ち目がない戦いはしないもんだ。いつしか外街の住民は中央に大人しく従うようになつていつた……」

ラスティの悲しげな語り口に、話の内容がやけに重く感じられた。「なんですか……。シオンが王城を中心として機能してゐる街っていうのは知つていたんですが……」

「そ、こ、で。だ」

だが、束の間の消沈の後、ラスティはいきなり楽しそうな表情を浮かべた。

「このフロントの住人は、貧しくて、不満が溜まっていて、狂暴な

輩が多い。だから、この街はありえないくらい治安が悪いんだな……

「な……」

「なんですか……。急に……」

「どれくらい悪いかつて言うと、一人で街を歩くと屈強な奴らに囲まれて身ぐるみ剥がされるぐらいだ……。だから身寄りの無い人々はギルドと呼ばれる徒党を組み日々生活している。でも……ふふ、残念だな。この団体はボランティアじゃないんだ。不利益をもたらす人間を置いておくわけには……」

先程の悪戯な笑いの意味はこついう事だったのか。フインは心中で舌打ちをした。

ラスティの話が本当か嘘かはわからないが、フインは脅されている。

「いやな、ことを仰りますね」

さて、どうしよう。

いや、また。この街にはしばらく滞在するつもりだ。ならば、一定期間安定した寝床が必要になる。当然身を守れるだけの安全性も確保しなくてはならない。

どつちみち後ろ盾は無いよりはある方がいいし、助けられた恩つてのもある。

……この男が俺を利用するというならば、利用されるのも悪くない。逆に、俺が利用してやればいいだけのことだ。

シヴァだの、セリカだの、アルフレッドだの、メンバーは気に入らない奴らだが、どうせ情報を集めるだけ集めたらトンズラかますんだ。少しの間の辛抱だ。

……悪くないな。

「ならば、仕方ありません。この団体の一員として、協力いたします」

姿勢を正したフィンは、深い黒の瞳で真っすぐにラスティを見つめた。真面目な顔を浮かべているつもりだが、どうだろ。気味の悪い笑みなどは表れてしまっていいだろか。

そんな心配をしつつ、心中では、自分でも不思議なぐらい汚れた思惑がゆっくりと渦を巻いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3175a/>

Release

2010年12月14日19時43分発行